

淀川に河川公園をつくる

大石 右 正*

淀川の高水敷は、戦後も長い間荒れ放題で、身のたけをこす草がぼうぼうと生い茂っていた。堤防や護岸の補強に追われて、高水敷の整備まで手が回らなかったのである。ところが近年のあいつぐ出水の状態からみて、淀川の治水の安全度を高める必要が起り、この数年新しい改修計画が進められてきた。新計画では200年洪水を目標とし、上流部でダム群による洪水調節を行ない、従来6950 m³/secの計画流量であった河道を掘削して12000 m³/secの流量を安全に流下させる方式である。この計画が実施されると、淀川の高水敷の冠水は、いまでは1年に数回のみみられたが、数年に一度という頻度になる。ここに、この広大な高水敷がいかにあるべきかということが、大切な問題として浮んでくるのである。

ここで淀川と社会の結びつきをふり返ってみたい。むかし人々は飲料水を求めてこの川のそばに住みついたことは想像にかたくない。そして、川は長い間、経済の基盤であった農耕のための用水を供給し、また付近の村落の発達につれ、家や田畑を洪水から守る堤防の必要性が増した。淀川はまた長い間、京都、大阪を結ぶ交通路として舟運が盛んであった。ときには権力者により軍事上の価値が加えられたこともある。これらのため、治水利水工事が各時代にまたがって実施されてきた。漁業も古くから行なわれ、近代になって発電や砂利採取の事業も盛んとなった。川水はまた、上水・工業用水として沿川都市にとってかくことのできない命の水であり、その需要は年を追って急増の一途をたどっている。

淀川と社会との結びつきはこのように多様であり、これら各種の利用形態は互いに相反する面をもっている場合もあるが、その時代の社会の要望にそうように、ある調和のとれた点で共存してきたといえる。そのために各時代の経済力や技術水準に応じて姿を変えてきたのである。現在はどうであろうか。

かつて淀川筋にはぐくまれた数々の古い生活と景観は遠い過去のものとなった。沿川の都市化は急激に進み、生活環境のたちおくれ、大気・水質の汚染も増し、市民は緑や水から遠ざかった、うるおいのない都市生活をよぎなくされている。これらの状況から大都市の中を貫流するこの広大な河域を淀川河川公園として、人々に快適

な自然環境を提供しようとする企ては当然の帰結ではないだろうか。高水敷は洪水時に流水の支障があってはならないので、大きな構造物をつくることは許されない。したがって、平面的な利用しか考えられないが、公園の建設ならば工夫によってそれほどの支障を与えないですむ。河川敷を公園に解放する試みはすでに各地で行なわれ、多摩川、武庫川、旧淀川中之島公園など、それぞれの持ち味がたくみに生かされている。淀川の公園計画を検討しているうちに、これは単に都市の公園不足を補うだけのものではなく、多くの特色をもった他にかげがえのないものであることがわかってきたのである。

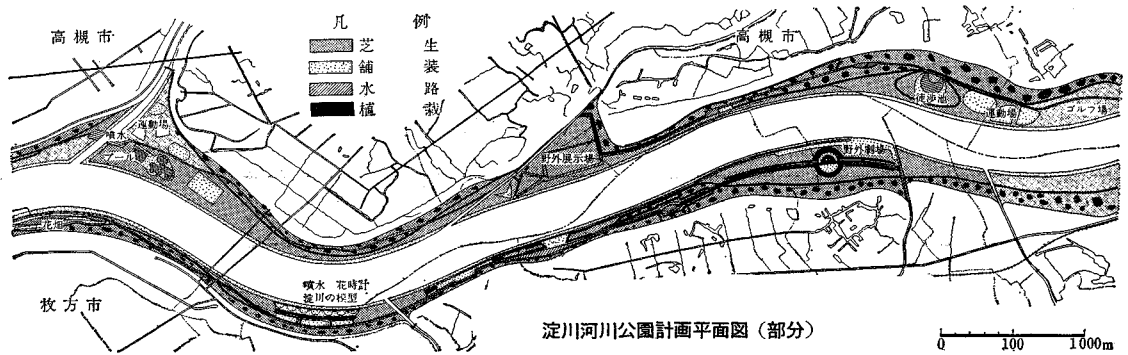
その特色とは何か。

そのひとつは、まず川の流れがあることである。溪流部でみられるような清冽な水の流れは人の心をとらえ、いいしれない安らぎを与える。淀川の洪水も、近年は水質汚濁からまねかれることができず、けっして清浄とはいえないが、京阪神近郊の河川がほとんど死の川と化した現在、わずかに残された魚の住む生きた川である。いずれ水質浄化については、下水道事業・排水規制・水質開発・水の高度処理・排水の再利用などあらゆる努力が払われようとしており、しだいに清らかさをとり戻すだろうが、人々はその間に生息する魚や虫や鳥と語って、もののいのちのあわれさを感じとり、あるいは鮒を釣り、めだかをすくった故郷の川を思い起し、また、流れる水に時の移り変りを感じ、昔のよさを偲ぶのである。

水面では色とりどりの舟遊びが盛んとなり、昔時、淀川を上下した「三十石舟」や、これに小舟を乗りつけて餅や酒を売りつけた「くらわんか舟」が復活するかもしれない。花火大会、灯籠流し、夜店などのなつかしい行事もあちらこちらで催され、夏の風物詩となるだろう。水辺の魚釣りは現在でも多くの人に親しまれているが、公園が整備され、魚の家などが設けられると、さらに多くの人に加わるようになるだろう。この広大な水面については、新しいアイディアなども生れて、もっと密度の高い多角的な利用がはかられてもよい。

本来、川は自然の構成の一つとして、人間生活と密接なつながりをもっていた。それが、近年は治水や用水問題に追われているうちに、人と川のふれ合いはだんだん薄れ、とくに都市部でははっきりと断絶が起ってしまっ

* 正会員 建設省近畿地方建設局企画部長



たのである。公園計画が生まれ、ここにふたたび川が自然と人間の対話の場のひとつとしてよみがえろうとしているのであるが、この意味で、淀川につくる公園は河川敷公園といわず河川公園といっている。

第二の特色は広さである。公園の第一期計画の木津川・宇治川・桂川の三川合流点から河口まで 35 km の間に 1000 ha の高水敷があり、水面を合せると 2300 ha を越える。この広さは、多様性を与える。上流部田園都市、中流部郊外地区、下流部都心部といった沿川各地の状況に適応させて特色をもたせることができる。ある地区はスポーツ中心、また野外展示場や各種の催し広場のよう文化的色彩の強いもの、あるいは自然的野性的な地区といったものである。

なかでも、この広大さから、自然的な草原などを十分にとれることは、他にかけがえのない特色である。高水敷の基調となるものは、芝生やレンゲ、クローバのはらっぱであり、各種の花畑や、灌木やヨシやアシの草原などである。これらは、全域を通じる一大植物園・自然庭園ともいえる。子供らはこのはらっぱで、車におびやかされることなく、とびはねて遊ぶことができ、ピクニックの家族は緑のじゅうたんの上で、ひるげの宴を開くだろう。春にはレンゲやナタネ、ツクシなどのつみ草のはらっぱ、秋にはススキやハギ、キキョウなどの秋草のはらっぱができる。草原では野鳥や虫類が生活を営んでいく。

ここに、自然性について一部から批判がでている。高水敷を整地し、コンクリートの護岸を設け、運動場・遊園地・芝生公園などはいかにも人工的画一的で自然で、大らかな景観を失い、小鳥や昆虫をしめだし、自然環境を破壊するということである。しかしながら、マムシのうようよはい回っているのを、ほっておくわけにはいかない。ふみ込めば足の抜けなくなるような沼地も危険であり、森やジャングルのようなものが川の中にあるのも不適當である。自然保護といっても、手を絶対ふれるなどというわけにはいかない。川に対しては治水上の安全性を確保することが絶対的であり、その上に立っての自然性の論議がなされるべきであろう。淀川の河川敷は、明治大正年間に何度も大改修が行なわれ、その大部分は人工的につくられたものであり、そこに存在する自然は、

その後の年月の間に発生したものが多し。河川公園の自然性についても、治水をはじめ、川のもつ他の機能と共存する範囲で、手の加え方を工夫して、新しい自然をつくりだすことが検討されなければならぬ。

沿川各都市で不足している運動場も適宜つくれる。堤防や橋の上から通行者が見て楽しむ修景的な美しさにも考慮し、余裕ができれば、団地生活で土のにおいから遠ざかった人々のための貸し畑もできる。こうして広さがあるための多様性、自然的という特色から、自然と人の対話のみならず、人と人の交歓のための催しが、いろいろと創造されるだろう。

第三の特色は長さである。本川が 35 km あるほかに、木津川・宇治川・桂川の改修とともに河川公園の区域もつ、嵐山・宇治・笠置など上流部の名勝地とも結びつく。この長さを生かす利用形態として考えられるのは緑道である。豊かに流れる水辺をとおり、はるかに金剛生駒の山脈を望み、春や秋にはそれぞれの景観を楽しみながら散歩やハイキングができる。兩岸の渡し舟もところどころ復活し、左右岸を周遊して出発地に帰ることもできる。淀川沿川には文化財や名所旧蹟に富み、変化のある周遊コースが各種生れるだろう。アスファルトやコンクリートの道のほかに、しっとりとした土の道も必要であろう。サイクリングはそれ自身非常にすぐれたスポーツである。これやマラソンなど自動車や排気ガスで追いつめられてきたのが、淀川の美しい環境の中でよみがえることができよう。

このように、河川公園の特性を考えてみると、その輪郭はおのずから決ってくるが、この建設は国営公園として昭和 47 年度から始まっている。完成までには相当の年月がかかるだろうが、社会の動向については常に公共のためという理念のもとに対応していかなければならないし、その内容についても、時とともにさらに充実した価値の高いものに改善されなければならない。

この公園が人々に愛され、十分に利用されるかどうかは公園の維持運営にかかってくる。公園の管理は、この公園の特色を損わず、利用者の安全と利便のためにも治水や利水など川のもつあらゆる機能の保持と同時に河川管理の一部として、一貫した統一的な管理が望まれる。